

「‘教えること’と‘看護すること’における‘わざ’に関する 研究・教育の国際カンフェランス」報告

浅田 匡

2019年11月9、10日早稲田大学、11月16、17日甲南学園平生記念センターにて、アメリカ、イギリス、ニュージーランド、タイから研究者を招き、以下のような趣旨の下、研究発表、ワークショップ、シンポジウムから構成された国際カンフェランスを開催した。両会場とも2日間で100名を超える参加者があり活発な議論が展開された。本稿では、まず国際シンポジウムを中心に報告を行う。

本カンフェランスは、教師、看護師など人を対象とした専門職の持つ「わざ」をどのように明らかにし、そしてその「わざ」をいかに教えるあるいは伝えるか、を課題に取り組んできた研究成果の発表とそれに関連する国際的な研究交流の場を設け、さらなる「わざ」研究の発展を図るものである。「わざ」とは何かと問われると、職人技がすぐにイメージされる。また、同時に熟練、あるいは熟達という言葉が頭に思い浮かぶだろう。しかしながら、教師や看護師における「わざ」や熟練した教師、熟達した看護師とはどのような教師であるのか、看護師であるのかを簡単には明示できない。それは、人を対象とする専門家のわざは、チェスやピアニストのように専門家が持つスキルや知識などのコンピテンスだけではなく、専門家がコントロールできない、相手（患者や子ども）さらには彼らを取り巻く人的・物理的環境要因が、わざの活用を制約するからである。すなわち、具体的な状況において、最も適切と考えられる行為を生み出すことが「わざ」の重要な特徴であろう。そうであるならば、教師や看護師の「わざ」を明示するためには状況を含めた「わざ」を記述することが必要であり、「わざ」を教えるとは具体的な状況との組み合わせにおいて教えなければ実践においてそのわざは機能しないことになる。

本カンフェランスでは、教師教育、看護教育において問題とされてきた「わざ」への研究アプローチとして取り組んできた研究成果を問うとともに、「わざ」をいかに教えるかに関してリフレクション、コーチング、シミュレーション、現場主義教育というアプローチによる取り組みを取り上げ「わざ」の教育を考える。そして、「わざ」研究のさらなる発展に寄与することを願って行った。

2019. 11. 10. 早稲田大学小野小講堂における国際シンポジウム

【企画趣旨】

教師や看護師の専門性は、これまでの熟達化研究において定型的熟達化ではなく、適応的熟達化として問われなければならない。それは、新たな状況において適切と考えられる行為を教師あるいは看護師はその場で行わなければならないということである。すなわち、これまでの研究知見や自らの実践経験、さらには熟達者から学んだ実践に関する知識を活用するだけでなく、それらを用いてその場で適切と考えられる行為を創り出すということが専門性として求められる。これが教師や看護師が持つ「わざ」の特徴と言えるだろう。そうであるならば、教師や看護師が有する「わざ」とは何か？また、その「わざ」をいかに教えるのか、は教師や看護師に代表される、人を対象とした専門家教育において重要な課題であることは疑う余地はないであろう。しかしながら、教師や看護師のわざを記述することすら難しいのが現状であり、わざを教える方法は経験知のレベルにとどまっている。本シンポジウムでは、わざを捉える試みの1つとして、教師による机上シミュレーションによる研究を提案し、それをめぐってコーチング、リフレクションを鍵とした教育、シミュレーション教育という立場から、教師や看護師のわざとは何か、また教師教育、看護教育においてわざをいかに教えることができるかについて考えてみたい。

【シンポジウムの内容】

日本赤十字看護大学(現広島赤十字看護大学学長)田村由美教授と早稲田大学浅田匡がコーディネータとなり、リーダーシップ・コーチングを専門とするJan Robertson先生(前ロンドン大学教育研究所ディレクター)、看護教育におけるリフレクション研究の専門家であるChris Bulman先生(オックスフォードブルックス大学准教授)、大学教育におけるシミュレーション教育コーディネータであるTori McPetrie先生(カリフォルニア州立大学シミュレーション専門員)をお迎えし、机上シミュレーション法による教師のリフレクション研究を行なっている中村駿先生(前早稲田大学人間科学学術院助手)による研究成果の発表をベースに、それぞれの研究に基づいて『「わざ」はいかに教えられるか』についての議論を行なった。

中村先生は、教師のリフレクション・イン・アクションを明らかにするための机上シミュレーション法(図1)を示し、その研究プロセスにおいて新任教師のリフレクション・イン・アクションを促す方法としても有用であることを報告した。具体的には、リフレクション・イン・アクションは、教師が教室内での様々な相互作用における多様な関係をどのように知覚するか、に左右されることが示された。すなわち、授業でのある瞬間にリフレクション・イン・アクションが行われるのではなく、授業での様々な事象の関連性の知覚に基づいて行われていた。また、リフレクション・イン・アクションは教えることはできないが、学ぶことやコーチングは可能であるというショーンの主張のように、机上シミュレーションを行うことによって、教師自身が自らの指導法を批判的に考え、授業状況を解釈・枠づけるということが促されていた。



図1 机上シミュレーションにおける教師間の相互作用

Tori McPetrie先生は、カリフォルニア州立大学ノースリッジで行われている、教師教育プログラムにおけるアバターによるビジュアル・シミュレーション(図2参照)を演示しながら、シミュレーション教育の利点と問題点を示した。それによれば、①これまでは利用できなかった臨床的な経験を提供できること、②対人関係スキルを伸ばすことができること、③新しい方法で学び合えること、が利点として挙げられた。さらに、授業場面以外でも保護者との面談、特別支援教育などの場面にも適用できる方法であった。一方、制約としては設定されるアバター(生徒)の数や設定できる状況(場面)に制限があることであった。



図2 ビジュアル・シミュレーションの画面

Chris Bulman先生は、省察的な看護という観点から「わざ」ということについて次のような提案をされた。「わざ」は、調和、歴史、スキルの複合体として概念化することができ、それは本質的に日本の固有の概念である。その「わざ」は、看護学において、ショーン（1987）が専門的実践という「沼地のような低い土地」について語ったときに言及した能力として理解することができる。沼地のような低地は、エビデンスに基づく実践（EBP）などの看護概念が主流である「硬い高地」とは対照的である。EBPにおいては、専門的な実践は研究の証拠に基づくことができるという幻想に基づいている。しかし、経験的証拠は、看護に必要な知識、理解、スキルのほんの一部しか提供していないことを私たちは知っている。したがって、EBPの代わりに、「わざ」とよりよく一致するものとして「批判的な存在（Critical Being）」の概念を提案する。この批判的な存在であるということ、あるいは批判的な存在になることの鍵は、リフレクションにある。

最後に、Jan Robertson先生は、リーダーシップ・コーチングの研究を踏まえ、教師あるいは看護師の知識ベースという観点から「わざ」についての考えを展開された。それによると、「わざ」は①Enacted PCK (ePCK)、②Personal PCK (pPCK)、③Collective PCK (cPCK)、の3つの内容を教えることに関する知識 (PCK: Pedagogical Content Knowledge) から作り上げられる (図3)。



図3 「わざ」を構成する3つの知識

ePCKとは専門家が現実に行っていることであり、pPCKとは専門家が実践について知っていることである。cPCKは、専門家が効果的な実践について知っていることである。そして「わざ」が発達するには、これらの知識間の絶えざる相互変換が求められる。その知識の相互変換を行うために、実践を批判的に省察する能力と思考ツールを有すること、教授活動の基本的な知識とカリキュラム内容の知識を有すること、そして実践を開発し、「わざ」と自己効力感を広げることのできる注意深く支援された実践をもとにした機会が与えられること、が必要である。

以上の提案を受けて、参加者からの質問や意見に対する応答を含め、活発な議論が展開された (図4)。



図4 シンポジウムの様子 (小野小講堂 2019.11.10.)

2019. 11. 17. 甲南学園平生記念センターにおける国際シンポジウム

ここでは、シミュレーション教育に代わり、タイ パンヤーピアット経営学院で実践されているWork-based Educationの実践に基づく提案をしていただき、「わざ」の教育についてさらに語論を行なった。

【企画趣旨】

教師や看護師の専門性は、これまでの熟達化研究において定型的熟達化ではなく、適応的熟達化として問われなければならない。それは、新たな状況において適切と考えられる行為を教師あるいは看護師はその場で行わなければならないということである。すなわち、これまでの研究知見や自らの実践経験、さらには熟達者から学んだ実践に関する知識を活用するだけでなく、それらを用いてその場で適切と考えられる行為を創り出すということが専門性として求められる。これが教師や看護師が持つ「わざ」の特徴と言えるだろう。そうであるならば、教師や看護師が有する「わざ」とは何か？また、その「わざ」をいかに教えるのか、は教師や看護師に代表される、人を対象とした専門家教育において重要な課題であることは疑う余地はないであろう。しかしながら、教師や看護師のわざを記述することすら難しいのが現状であり、わざを教える方法は経験知のレベルに止まっている。本シンポジウムでは、わざを捉える試みの1つとして、看護の臨地実習指導者による机上シミュレーションによる研究を提案し、それをめぐってコーチング、リフレクションを鍵とした教育、Work-based Educationという立場から、教師や看護師のわざとは何か、また教師教育、看護教育においてわざをいかに教えることができるかについて考えてみたい。

【シンポジウムの内容】

甲南女子大学前川幸子教授と早稲田大学浅田匡がコーディネータとなり、リーダーシップ・コーチングを専門とするJan Robertson先生(前ロンドン大学教育研究所ディレクター)、Bulman先生の共同研究者でもある看護教育におけるリフレクション研究の専門家のSue Schutz先生(オックスフォードブルックス大学准教授)、Work-based Educationを大学教育で実践されている、Tipawan Apiwanworarat先生(パンヤーピアット経営学院リベラル・アーツ学部長)をお迎えし、机上シミュレーション法による臨地実習指導者の教育的判断過程に関する研究を行なっている白濱郁子先生(前甲南女子大学助手)による研究成果の発表をベースに、それぞれの研究に基づいて『「わざ」はいかに教えられるか』についての議論を行なった。

Jan Robertson先生とSue Schutz先生の提案内容は、早稲田でのシンポジウムでの提案内容とほぼ同じであるため、ここでは割愛し、他の2名の先生の提案内容を示すこととする。

白濱先生は、看護教育において臨地実習指導者がどのように看護実践を教えているか、について机上シミュレーション法を用いて実習指導者の教育的判断過程を明らかにしている。具体的には、反省的实践者が予期せず自分の実践に気づいたという事実を焦点を当て(Schön, 1983)、その判断プロセスを明確にするために、11年の臨地実習指導者としての経験がある看護師Aを対象に、実習指導において患者が示した予期せぬ反応が見られた場面における看護師Aの判断過程の分析を行なった。その場面では、指導よりも看護師Aがその状況が「なぜ生じているのか？」と考え、その状況を看護師の視点から監視する必要のある状況であった。分析の結果、示された知見は次に示す3点であった。①実習指導者は、予想される出来事において、実習生の独立性を尊重し、実習指導者と患者、および実習生と患者の関係を考慮しながら、実践的なガイダンスが提供した。しかし、②予期せぬ状況が発生した場合、実習指導

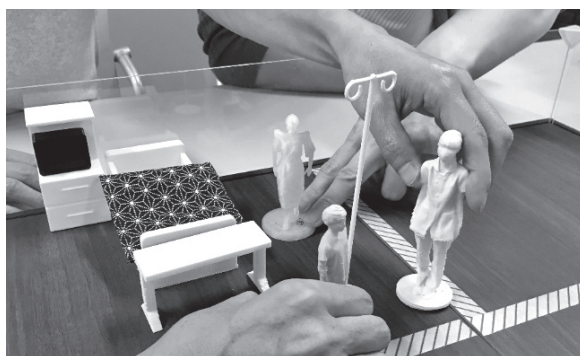


図5 看護における机上シミュレーション法

者は自らが看護師であるという視点から、その状況に対応した。③シミュレーションは、実習指導者が行った状況と判断プロセスを言語化することにより、実習指導者が実際の看護と実習指導における訓練を反映して想起する、実習指導者の学習機会になった。

Tipawan Apiwanworarat先生は、タイにおいて7-Elevenを展開するCP ALLが運営するパンヤーピアット経営学院での人材育成におけるWork-Based Education (WBE) の実践報告を行なった。WBEは、3つの要素から構成されている。まず、PIMの教員の70%が様々なビジネス組織や分野での直接の実務経験を持っている事による仕事に基づく教育である。これにより、ビジネス経験を学生と共有することができる。次に、WBEはネットワーク関連の会社でインターンシップを行う機会を学生に提供する。学生は、教室で学んだ理論をインターンシップでの実際の仕事に適用することができる。最後に、スーパーバイザーの下で調査方法論を通じて問題を解決する方法について仕事に基づく研究として学ぶことである。すなわち、教室での学習とインターンシップでの現実の仕事とを統合することに特徴がある。要するに、仕事ベースの教育モデルでは、教室で理論を学んだ後、学生は民間および公共部門のネットワークでインターンをする必要がある。さらに、そのような学習を国際的なネットワークのもとで展開もしている。その結果、卒業生は、他の大学卒業生と比べて昇進が早く給与も3倍を得るなど、人材育成としての成果が出ている。また、小売業の離職率も平均10%であるが、6%と減少している。すなわち、「仕事に基づく教育によって専門家を育てる」というWBEが確実に成果を上げていると評価できる。

以上の提案を受けて、「わざ」を教えることについて、看護におけるリフレクション教育やWork-Based Education、そして「わざ」に関する知識の習得という視点から、活発な議論を行なった。(図6)



図6 シンポジウムの様子 (甲南学園平生記念センター 2019.11.17.)

以上が、早稲田大学及び甲南学園平生記念センターで行われた国際シンポジウムの報告であるが、両会場では2日間に亘り国際カンフェランスとして研究発表、ワークショップが合わせて行われたので、最後にそれらに関しても簡単な報告をしておく。

(1) 早稲田大学を会場とした国際カンフェランスでは、研究発表9件と3つのワークショップが行われた。研究発表は、看護関係3件、福祉関係1件、教育関係5件であり、早稲田大学をはじめ北海道大学、慶應大学等の若手研究者が中心であり、海外から招聘した研究者からの適切かつ建設的なコメントをいただく研究発表となった。また、ワークショップは、Bulman先生とSchutz先生による反省的な看護に関するワークショップ、Robertson先生によるリーダーシップ・コーチングに関するワークショップ、そして、(株)東京書籍によるデジタル教科書の活用に関するワークショップ、が行われた。いずれにおいても参加者の積極的な参加があり、有意義なワークショップとなった。



図7 ワークショップの様子 (リフレクティブ・ナーシング)

(2) 甲南学園平生記念センターを会場とした国際カンフェランスでは、同じく研究発表9件、3つのワークショップが行われた。ワークショップは、早稲田大学で行われた内容と同じであるが、デジタル教科書の活用に関するワークショップでは、大阪市及び西宮市でのデジタル教科書の活用事例の報告もあり、より具体的な活用方法についての検討が行われた。研究発表は、看護関係3件、教育関係3件、福祉関係1件、学校での実践報告1件、大学でのリーダーシップ教育1件と多岐にわたった。早稲田大学会場と同じく、海外から招聘した研究者からの適切かつ建設的なコメントをいただく研究発表となった。



図8 ワークショップの様子 (リーダーシップ・コーチング)

最後に、本国際カンフェランスは、早稲田大学人間科学学術院人間総合研究センターの支援を受け、科学研究費補助金基盤 (A) 「状況に埋め込まれた知としての「わざ」に関する総合的研究 (研究代表 浅田匡)」の研究成果発表と組み合わせることで実現した国際カンフェランスである。ここに、ご支援、ご協力いただいた人間総合研究センターならびに皆様に感謝を申し上げ、国際シンポジウムの報告とする。